



Title	Tympanoplasty with and without mastoidectomy for noncholesteatomatous chronic otitis media
Author(s)	三代, 康雄
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43128
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	三 代 康 雄
博士の専攻分野の名称	博士 (医学)
学位記番号	第 16448 号
学位授与年月日	平成13年6月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	Tympanoplasty with and without mastoidectomy for non-cholesteatomatous chronic otitis media (慢性穿孔性中耳炎に対する乳突洞削開併用ならびに非併用の鼓室形成術)
論文審査委員	(主査) 教授 久保 武 (副査) 教授 吉峰 俊樹 教授 細川 互

論文内容の要旨

【目的】

中耳炎は抗生物質出現以前は致死的な疾患であり、その手術は救命を目的とした排膿ドレナージ手術であった。現代では慢性中耳炎に対する手術は聴力改善を目的とした機能手術であり、特に慢性穿孔性中耳炎に対する鼓室形成術は先人の努力によって、安定した手術成績をおさめている。しかしながら、手術時に乳突洞削開を必要とするかについては意見の分かれるところである。すなわち1) 全例必要である、2) 耳漏のある症例には必要である、3) CTで乳突洞に軟部組織陰影を認める症例には必要であるという主に3つの意見があるが、いずれも科学的な根拠を示した報告は殆どない。本研究では同一の術者が手術した自験例を検討し、乳突洞削開の必要性の有無を明確にするとともに、Evidence Based Medicine (EBM) に基づいた手術を行うことを目的とした。

【方法ならびに成績】

1987年4月から1998年9月までに同一の術者が手術を施行した慢性穿孔性中耳炎初回手術例439例のうち、耳後部切開でアプローチし、術後1年以上経過観察した251例を対象とした。平均経過観察期間は31.7ヶ月であった。

乳突洞削開を併用した症例をA群 (n=147)、併用しなかった症例をB群 (n=104) とし、A群、B群について鼓膜穿孔の閉鎖率、術後聴力成績、術後合併症について検討した。術後聴力は術後気骨導差が20dB以内の症例を聴力改善成功例とした。統計学的検定には χ^2 検定を使用した。

- 1) 鼓膜穿孔の閉鎖率はA群で147例中133例 (90.5%)、B群では104例中97例 (93.3%)、全体で251例中230例 (91.6%) であり、鼓膜穿孔閉鎖率に関して両群間に有意差を認めなかった ($p=0.620$)。
- 2) 術後聴力改善成功率はA群で147例中120例 (81.6%)、B群で104例中94例 (90.4%)、全体で251例中214例 (85.3%) であり、術後聴力成績に関しても両群間に有意差を認めなかった ($p=0.056$)。
- 3) 手術時に耳漏のあった症例は54例 (21.5%) であった。このうちA群は40例、B群は14例であった。手術時に耳漏のあった症例の鼓膜穿孔閉鎖率はA群で40例中36例 (90.0%)、B群で14例中12例 (85.7%)、全体で54例中48例 (88.9%) であり、両群間に有意差を認めなかった ($p=0.661$)。
- 4) CTは慢性穿孔性中耳炎手術に必須の検査ではない。今回カルテ上の所見ではなく、CTフィルムを直接再検討できた症例は68例であった。このうち乳突洞に軟部組織陰影を示した症例が35例、正常含気を示した症例が33例であった。軟部組織陰影を示した症例のうち、A群が6例、B群が29例、正常含気を示した症例のうちA群が1

例、B群が32例であった。軟部組織陰影を示した症例の鼓膜穿孔閉鎖率は35例中34例(97.1%)、正常含気を示した症例では33例中31例(93.9%)であり、両群間に有意差を認めなかった($p=0.520$)。また軟部組織陰影を示した症例のうち、A群の鼓膜穿孔閉鎖率は6例中6例(100%)、B群では29例中28例(96.6%)であり、やはり両群間に有意差を認めなかった($p=0.644$)。

5) CT上軟部組織陰影を示す症例の聴力改善成功率は35例中33例(94.3%)、正常含気を示す症例では33例中31例(93.9%)であり、両群間に有意差を認めなかった($p=0.952$)。また軟部組織陰影を示す症例のうちA群の聴力改善成功率は6例中6例(100%)、B群では29例中27例(93.1%)であり、やはり両群間に有意差を認めなかった($p=0.508$)。

6) A群では乳突洞削開時のバーの接触が原因と思われる術後高度感音難聴を1例(0.7%)、上鼓室側壁骨の過度の除去が原因と思われる術後性真珠腫を1例(0.7%)に認めたが、B群では特に重大な術後合併症を認めなかった。

【総括】

慢性穿孔性中耳炎手術に対する乳突洞削開の有無について長年の論議がされてきたが、本研究により必要性がない事が証明された。

論文審査の結果の要旨

本論文は retrospective な臨床研究であるが、同一の術者が長年にわたって行ってきた手術が対象であり、術者による技量の差が除外できるために結果に対する信頼性が高い。また症例数も251例と統計学的検定に十分耐えうる症例数である。また「慢性穿孔性中耳炎手術に対して乳突洞削開は一切不要である」という結論は従来の定説をくつがえす画期的なものであり、乳突洞削開を併用しないことでより手術時間が短縮され、より安全な手術が可能である。以上より、本論文は学位の授与に値すると考えられる。